

昔洋行、今ロータリー入会

福岡城西 釜瀬富士雄

「昔軍閥いま〇〇」とやら。それはともあれ、われわれが若かった昔は、「洋行」という名の、その実すばり海外観光旅行の実績が人に社会的賁禄をつけ、いわゆる洋行帰りは人間を一段格上げする所以、との観念がまかり通っていた。洋行帰りは得々と洋行間の話をし、他の者は一目置いてお説拝聴といった按配で、かくて誰しも一度は洋行をと、これに憧れる有様だったこともいまは微苦笑のうちに回顧されるあの頃である。

昔は海外旅行の条件を整えるのは容易ではなく、勢い選ばれた少数者だけしかその実績を持ちえず、その事例の稀少によって、いわゆる洋行帰りがその社会的存在性を大きくしたわけだったのだろう。それが今日は、どだい洋行なんて言葉は死語化しているではないか。海外旅行といえは猫も杓子も、金魚の何とかさながらに海外へ行く。洋行帰りだぞ、とふんぞり返っても人ははな(洩)もひっかけない。

ところが人間、何とか箔をつけたいのが人情の自然。かくて今日は、洋行に代わる何か

がマークされる仕儀になるわけで、その狙われるのが、まだ稀少の人しか入会を許されず、伝統のいとも重厚なロータリーへの入会ということらしい。先頃、地域知名のいわゆる顔役の一人がこんな言葉を吐いていた。「世界一周旅行も済ましたし、こんどはロータリーの会員にでもなるとしようか」と。かつての洋行に代わる今日の目玉がロータリー入会であることを、いみじくも象徴している、ということではあるまいか。

正に慥然たり！ さきに「デモシカ先生」が人口にかいしゃ(膾炙)したが、いま「デモシカロータリアン」の想念がはしなくも想いつかれてくる。神聖なロータリーが知名の顔役の社会的賁禄づけのだしに使われるのをみすみす見過ごしていいものだろうか。ロータリーに入会でもしようか、の動機の人物が、仮りに入会してしまったとなれば、ロータリーバッジを胸に、大道をわがもの顔にのし歩くだけしか能のないロータリアンに墮ちることとは火をみるよりも明らかなこと。

すでに会員である人の中に、こんなデモシカロータリアンがいるかどうかは措くとしよう。デモシカロータリアン候補をシャットアウトすることが、新しい時代の新しい局面を望んで、われわれロータリアンの大切な使命ではなかるうか。会員増強がいま、社会奉仕

団体としてのロータリーの基盤強化のための
大きな使命であるだけに。
(私立学校)